

## 人生を創る言葉

著書 渡部 昇一 致知出版社

---

### リンカーン

#### ◎世には卑しき業なく、ただ卑しき人あるのみ

ある朝、急用でホワイトハウスを訪ねたリンカーンの秘書ジェームズは、案内されて広間に入ろうとした。すると、廊下の片隅でしきりに靴を磨いている男がいた。秘書は何気なく傍を通り過ぎようとして、あっと驚いて立ち止まった。それというのも、大統領リンカーンがしきりに自分の靴を磨いていたからである。

ジェームズ秘書はリンカーンに向かっていった。

「大統領のご身分でそのようなことをなさるのを人に見られるのは具合が悪うございます。殊に貴婦人方に見られては困ります」

大統領は田舎丸出しで粗野な態度だ、という陰口を気にしていたので、忠告をしたのである。

すると、リンカーンは、人なつつこい目に微笑を浮かべながらいった。

「ほう、靴磨きは恥ずかしいことなのかね、ジェームズ君。それは違っていると思うな。大統領も靴磨きも、同じく世のため人のために働くものだ。世の中に卑しい仕事というものはないはずだ。ただ心の卑しい人はいるものだがね」

### ベートーベン

#### ◎忍従！それは苦しき人生の案内者である。

「忍従！それは今や私が案内者として選ばねばならぬものだった。私は自分が生まれたことを呪いさえた。……けれども、プルターク英雄伝が私を忍従に導いてくれた。何はあれ、力の及ぶ限り我が運命に戦いを挑もう……忍従の徳のみが幸福を与える。金銭は駄目だ。我が艱難の日に、この不幸な自分を支持してくれるのは忍従の力である。」

### 峨山禪師

#### ◎世間の人々が忙しいという、その半分は無駄に忙しい思いをしているものだ

「世間の人々が、やれ忙しい忙しいというのは、たいてい半分は無駄に忙しい思いをしているものじゃ。なんでも、無駄をせぬように心掛けるがよい」

工夫をすれば、時間はいくらでもつくれるという教えである。「忙しい」といっていても、その中身を細かく見ていけば、無駄な時間が多く含まれていることを峨山禪師は自らの体験を踏まえて説いている。そして、無駄を省くような心掛けが時間を生み出す秘訣になる

と教えている。

## シートン

### ◎僕は最後まで手を尽くした

シートンは十八歳のときに、ロンドンに絵を習いに行っていた。そこで、大英博物館の図書館には、世界中のあらゆる博物学の本が集まっているという話を聞き込んだ。小さなころから動物好きだったシートンは、早速その図書館へ駆けつけた。しかし、未成年者は入館できないという規則があるからと、断られてしまった。

諦め切れないシートンは、司書官に会って特別入館許可を求めたが、規則を楯に許してもらえない。それでも諦められず、シートンは尋ねた。

「これ以上訴えて出る裁判所のようなところはありませんか」

「いや、館長の許可があればいいのだけれどね……館長のお部屋は、このホールの端のほうだよ」

そこで、シートンは館長に面会して嘆願したが、やはり許可は得られなかった。

「これ以上お願いしてみるところはないでしょうか？最後に訴えて出る最高裁判所みたいなところとか、規則に縛られないシーザーみたいな偉い人とか……」

館長は、シートンの言葉に思わず唇をほころばせていった。

「評議員からの命令があれば別だがね」

「その評議員というのはどなたでしょう？」

「プリンス・オブ・ウェールズ殿下と、カンタベリーの大僧正と、総理大臣のビーコンスフィールド卿などが評議員だよ」

これらの人々はイギリスの最高位の人物で、そう簡単に近づける人たちではない。

シートンは館長の微笑に見送られて引き下がった。そして家に帰ると、この三人の評議員に向かって丁寧な言葉で、率直に自分の博物学研究的志望と図書館入館許可の希望をしたためた手紙を送った。

「どうせ許可は与えられはしないだろうけど、それでもいい。僕はできるだけの手は尽くしたんだ」

そう思っていたところが、意外にも、シートンの型破りの熱心さが認められて、二週間後に入館許可が下りた。それだけではなく、書庫出入の自由を許した終身閲覧券が添えられてあった。さらには、「一生懸命勉学に励むように」との三人の手紙もあった。